

フロム・ヘヴン

高橋 原

寒い、治安が悪いということばかり聞かされていたところに、マイケル・ムーア監督の *Sicko* を観て、少々重い気持ちで着いたイエール大学は、由緒ある欧米の大学を見たことのない者にとっては、僧衣のマルチン・ルターがそのへんからひょいっと顔を出すんじゃないかと思うくらい、シックな貫禄を醸し出していた。しかし、整然とした建物や街路に目が慣れてくると、せいぜいジョナサン・エドワーズが隠れているくらいかなと思えてくる（ジョナサンはイエールの卒業生である）。さらにそのうち、実はこれらの建物の多くは安価な労働力が豊富だった世界恐慌後に建てられた鉄筋コンクリートなのだと聞かされるにおよんで、キリスト教史上の偉人よりもむしろ、ハリソン・フォードのほうがこの地に相応しく感じられてくる。キャンパスでは昨年、インディ・ジョーンズの最新作のロケがあったばかりで、ジョーンズ教授が考古学の講義をしたり、バイクで駆け回ったりしていたのだ。

さて、2007年から宗教学研究室の助教という仕事をさせていただいているが、たまたまその9月に「東大ーイエール・イニシアティブ」という両大学の交流拠点ができた。そして、助教を半年間イエールに派遣するというプログラムが告知されたので、「渡りに船」と応募してみた。そうしたところがこれにパスして、現在コネティカット州ニューヘイヴ

ンに滞在しているというわけである。

学生時代から留学など自分には縁のない話だと思っていたので、これはまさに僥倖であった。任期付きの身で半年をもらえたのであるからなおさらである（感謝）。イエール大学は漠然と名門だという認識しかなかった。どれくらい名門かというオバマが就任するまでのここ20年間の米国大統領は全員イエール出身だそう。「ニューヘヴン」＝「New Heaven新天地」だと思っていたが、本当は「New Haven新港」ということや、コネティカットの綴りに「C」が3度も入ることもはじめて知った。ニューイングランドのお金持ちの大学街という程度の空想を抱いていたが、吸い殻だらけのストリートにはブルースのレコードジャケットで見たことがあるようなおじさんが立っていて、小銭をくれと声をかけてくる。バス停では「フレンド！」と呼ばけられてファンキーな人に靴をほめられる。郵便局では、ひとしきり“*Oh... I love your hat...*”のような言葉を聞いてからでないと注文した切手が出てこない。街の中心にある芝生の公園（通称グリーン）を歩くと、誰かが巡査に囲まれて手錠をかけられたりしている。この街は、大戦中に兵器工場の労働力をかき集めたところで、戦後になっても貧しい人々は居続けをし、逆に裕福な白人は郊外に散らばっていったというストーリーをたびたび聞かされた。店員、郵便局員、銀行員、ほ

とんどが黒人であり、音楽を聴きながらジョギングしているのは白人である。

ちょうど歴史的な大統領選挙の年であったが、もともと民主党が勝つことに決まっている土地柄のせいか、選挙戦の盛り上がりは特に感じなかった。もちろんテレビは連日選挙報道だが、アラスカの女性知事の姿くらいしか記憶に残っていない。ある日の深夜、近くのナイトクラブのあたりから、クラクションの音とともに黒人特有の怒鳴り声（歓声）が上がり、オバマコールが続いた。テレビをつけてみるとマケイン候補の負け演説が始まったところだった。それで選挙は終わった。

そんな街と大学は一体化していて、飲食店が並ぶ界隈とキャンパスに明確な境界はない。煉瓦造りや石造りの塔や建物がストリートに面して続く。各学部の建物や学部生が暮らす寮である「カレッジ」も通り沿いにあるが、そのゲートは、大学のIDカードの認証によって守られており、内部は遮断されている。芝生の中庭では女子学生が寝そべってMacBookを開いている。無線でインターネットが来ていて世界とつながっている。

今回の渡米は、学位の取得をめざすわけではないので、「ほんもの」の留学ではない。「出張」と呼ばれてはいるがノルマは無い。Visiting Fellowという肩書きで自由に研究をしていけばいいという極楽とんぼである。何よりも電車通勤がないのがナマケモノの自分にはありがたい。それはともかくとして、研究に関わる生活について少し書いてみる。

朝食を済ませて（といっても昼を過ぎていくことが多かったりするが）、グリーンを抜ける小径を5分も歩くと大学のメインライヴラリに着く。重い木の扉を開けると、ステンドグラスをあしらった教会堂のようなホールに出る。図書はすべて書庫に収められているが、自分でカウンターに持って行って借り出

す。冊数の制限はない。返却期限が一年後であることに驚き（滞在期間は半年なのに）、すごく得をした気持ちになる。2階のEast Asian Libraryには日本語の辞典類が充実しており、『宗教研究』等の日本を代表する雑誌も置いてあるので調べ物には重宝する（他にAERAとか新潮45とか…）。私の知るかぎり、日本人の図書館スタッフも二人いる。深夜2時まで図書館で勉強ができる。

今回は明治時代の日本人留学生と宗教研究の動向の調査を研究課題に掲げているので、資料収蔵部門であるManuscripts and Archives (MSSA)に通うことが多くなった。18世紀から今日までの、各学部各年度の個人学生名のファイルが集められている同窓会資料、学期ごとの学部の成績報告書、教授名ごとにまとめられた原稿や書簡類など、大学史に関わる資料が蓄積され保管されている。オンライン化された目録を手がかりにめぼしい資料をリクエストすると、翌日に、郊外の保管庫からボックス単位で現物が配達されてきて、広い閲覧室で手に取ることができる。もちろん、そうそう「使える」資料に出会えるわけではない（実際、今回も空振りばかりであった）が、アーキヴィストやアシスタントが何人もいて、外部の研究者に協力的な環境ができていく。メモ代わりにデジカメでの撮影ができるのも非常にありがたい。マイクロ資料も開架式で、コンピュータに接続されたリーダーを使って画像をメモリに保存して持ち帰ったり、自分のメールアドレスに送ることができる。もっとも、フィルムの鮮明な表示という基本性能に関しては、昔ながらの手回しの機械のほうが優れている。

明治期の日本人留学生による宗教学の卒業論文でも見つけられればという目論見は外れたが、大学の古い便覧などを順に見ていると興味深い発見もあった。イェールはリベラル

アーツ中心の大学で、学部4年間は専門研究よりも古典語や歴史を学ぶことが重視されてきた。一方で、聖職者養成の伝統を持つ神学部が独立性を保ちつつ力を持ってきた。したがって、大学院の哲学系科目として「宗教哲学」が開講されていた他には、「宗教学」などという学科の居場所はなかった。1919年に「言語・文学・芸術」コースの一部として「宗教」類が設けられたが、「宗教学科」の開設には1964年を待つ必要があった。しかし、おおよそこのような歴史の中で、1890年から1896年の間だけ、「比較宗教学」が開講されている。これはなぜなのか。単なる人事上の偶然に過ぎないのだろうか。同じこの時期に、そう遠くないボストンでは岸本能武太がハーヴァードに学び、アンドーヴァーでは神学のリベラル化をめぐる論争が熱く盛り上がり…。そんなあれこれを気ままに調べているうちに3ヶ月が過ぎ、12月には冬休みをとるに過ごすために日本から家族がやってきて、研究は小休止となった。(なお、不覚にもイェール到着後に、宗教学科の大先輩である篠原享一先生(1967年修士)が現在イェール大学宗教学科で教鞭をとっておられるのを知った)。

ところで、今回、渡米に踏み切ることができたのはインターネットの存在によるところが大きい。電子メールを介して研究室の仕事をある程度継続できる(もちろん事務補佐員の方々をはじめ多くの方の助けを借りて)ので、「外遊」の罪悪感を軽減できる。家事育児を放り出して後にしてきた家とも、ネット電話を使っていつでも無料で顔を見ながら会話ができる。これだと、子供にとっては、お父さんは隣の部屋で仕事をしているくらいのものではないかと思う(つかみ合い殴り合いの兄弟喧嘩が増えたらしいが)。渡米前のアパート探しも電子メールのみで何とかなつたし、ここ10年ほどで格段に海外留学のハードルが

下がったと思う。朝起きてコンピュータを開き、最初に目にするのがYahoo! Japanのトップページというような毎日だと、ロス疑惑の新展開から麻生首相の漢字の読み間違いまで、日本のニュースは全て目に入ってくる。阪神が優勝を逃したプロ野球のペナントレースの行く末も、箱根駅伝の東洋大学初優勝も、その気になればネット中継で楽しむことが可能である。便利な世の中になったものであるが、せつかく地球の裏側まで物理的に移動しても意識の断絶、変革が起こりにくいのはもったいないことである。漱石のように発狂までいっては困るが、本来はあってしかるべき、不安と孤独の中で自分と向かい合い禁欲的に学問のことを考えるとといった経験がしにくい昨今だと思う。

東大との学問的環境の違いについて感じたこともある。メールその他で、毎日のようにどこかで催されている研究会や講演会の知らせがある。4時過ぎに始まり6時頃に終わるものが多いが、専門的なテーマにもかかわらず一般学生も含む多くの人出席してくることに感心する。かつてユングが「心理学と宗教」という講義を行った由緒ある「テリー・レクチャー」を聴講する機会もあったが(今年はDonald Lopez教授の"Scientific Buddha")、やはり多くの聴衆が集まった。よほど勉強好きなのか、終了後に用意されているリフレッシュメント(酒類含む飲み物、軽食)が目当てなのか。おそらく、学生、教員のほとんどがキャンパスほど近くに暮らしているということが大きいのだろう。ちょっとした研究会に出るのにも電車に乗って1時間あまりかけて来なければならぬ東大では、なかなかこういう雰囲気は育ってこないだろう。学生や教員の寮が本郷の構内にあってもいいのにも思ったりする。

それから、ギャラリーにゴッホやセザンヌ

が所有されていて、いつでも観に行くことができる。たまたま滞在中にピカソも来た。アフリカンアートの数々も展示されていて、人間の精神の自由を教えてくれる。東大でもゴッホを買ってほしい…とは思わないが。

外国人が多いのもイェール大学の特徴である。ある数字によると、学部生：院生：留学生=5,275人：6,083人：1,770人で、教員：外国人研究者=3,384人：1,874人である。自分はこのうちの最後の数字にカウントされるのだと思うが、外国の大学に滞在してみて、やはり留学生は大切にしなければという気持ちが芽生えてきた。今回の渡米の収穫はこのことに尽きるかも知れない。縁もゆかりもなかった異国の大学に短期間ながら滞在すると、心細い中で出会った人と土地にそれなりの愛着を感じるようになり、いずれ機会が訪れたら一肌脱いで恩返しをしようという気にもなる。以前は、大金を投じて外国人留学生の受け入れに当てようとする日本政府に対して、そんなことよりも自分の国の苦学生を援助してくれと思っていたが、将来的に国際紛争の当事国にでもなった時に、相手国の指導層に1人でも親日家がいるといないとでは大違いであろう。情けは人のためならずということか。

最後に、つい昨夜のことだが、氷点下の寒さの中で遊び歩いたのがいけなかったらしく、正月早々、三男の熱が40度を超え、全米ランク15位とかいう近くのYale New Haven Hospitalの夜間救急外来にかついで行った。冒頭で言及したSickoでは、生き馬の目を抜く保険社会アメリカが告発されていたのだが、今回は、事前に保険会社の日本人オペレーターにキャッシュレスで受診できることを確認し、病院に話を通してもらってから出かけたので安心であった。ただの風邪だろうという診断にも安心したが、これらの安心は妻

と子供3人まとめて23,000円の保険料で買ったということになる。格安に思えるこの値段はウェブ上での契約の特典であり、ここでもインターネットの恩恵を受けることになったのであった。

紙幅が尽きたのでここで筆を擱く。極寒のニューヘイヴン滞在も残りわずかとなった。

(追記)

子供の熱が下がらないので再度病院に行くとは今度は採血からX線までフルコースの検査をされ、軽い肺炎だとわかった。これもキャッシュレスで済んだのはありがたかったが、入れ替わり立ち替わりやってくる若い女医たちが、しきりに"Kawasaki Disease"の可能性を気にかけていた。川崎病の後遺症が疑われるトラボルタの息子の訃報が踊ったばかりなのであった。